

『現代中国語の意味論序説』の刊行とその発展

中国語学科 松村 文芳 著



1994年4月に神奈川大学外国語学部中国語学科に赴任して直面した問題は中国語を専攻する学部生、三・四年生に「中国言語特講」をどのように講義するかということであった。最初に使

用したテキストは評価の高い文法書であったが、学生から「テキストの内容をそのまま教えてもらっても新鮮みがない」という不満が出た。そこでテキストは変えず、講義は内容を前任校で8回ほど国際漢蔵語学会（米国の大学教員の組織）に提出して読み上げた英文の論文を日本語になおして行うことにした。この当時はまだ研究の理論的枠組みが定まっていなかったので記述言語学の手法で小説やラジオ番組の中国語を調査して自説を中心に論を展開した。英文の論文の利点は曖昧性がないこと、論理的でなければ受け入れてもらえないことであるので講義に用いるには便利であった。

それ以後は学生の不満を耳にすることはなくなったが、講義内容に対して担当者である小生がストレスを感じるようになった。客観的な内容にするために形式や言語資料にこだわって意味の説明が十分でないことに気づいたのである。前任校での二回の米国在外研究の後半は週12コマの授業を聴講して言語学科の主要科目の大枠を勉強したが、その中で「形式意味論入門」と「形式意味論応用」の聴講から得るところが大きかった。同

時に小生のホストの先生が担当する「コンピュータ言語学」と「コンピュータ言語学応用」の中で学習した技法が後の研究の支えとなった。そこでこれらの研究を講義内容に反映しようと意識するようになった。

その結果テキストをより論理的な内容を有する『文法講義』に変更し、その統語的説明を意味論の視点から捉え直すことにした。情報数学、論理学、英語意味論、記号論理学の諸著作から発想、手法を拝借し、それらの研究成果に負うところが多いが、最大の成果は言語研究センターのCALL教室で講義し、板書することによって学生、院生と議論することができたことである。前任校では十分な研究時間が保証され、それ相応に研究成果もあがったが、その発表に対するフィードバックが存在しなかった。講義日の前夜まで鉛筆と消しゴムで格闘する日々がいかに貴重であるかを実感している。

最後に本書の内容を発展させた論理式を紹介しておこう。「我是昨天進的城。（私は昨日町に行ったのだ。）」という文はこの文の成立過程を示すと「進’（我，城）&有’ {進’（我，城），了}」が格役割演算を「&有’（了，ET）&<’（ET，RT）&=’（RT，昨天）&<’（昨天，ST）」が時間点演算を「&有’（ST，的）&有’（的，[様相]）&有’（[様相]，断定）」が様相演算を「&有’（断定，[焦点]）&有’（[焦点]，昨天）」が焦点演算を表し、論理式の全体はこれらの式を順に連結すると完成する。連言（&）の前後の命題の項の間に連鎖関係が存在することが重要であり、これがなければ何の価値もない式になる。（完）